

続ボラッチョ・ボニートのメキシコ便り(No.16)

「あっちへ行け腹黒め」

・・・どっちもどっちだ・・・

日本では、衆議院議員選挙を目前に控えて、今後の政局を見る上で何かと注目されているが、当地では、7月5日に、2年前に行われた大統領選挙のあとの、中間選挙に位置づけられている、下院議員選挙(500議席)、地方選が行われた。

新型インフルエンザ感染拡大を受けて、色々な制限を設けたガイドラインを策定したので、各政党は大規模集会を中止したり、テレビコマーシャルを自粛するなど、選挙戦は様変わりしたという。

結果は、エル・ユニベルサル紙によると、下院選は、野党、制度的革命党(PRI)が106から241に大幅に議席を増やし、カルデロン大統領の与党、国民行動党(PAN)の議席は、206から1476に減り惨敗した。

世論調査では、現大統領の支持率は52%近くあり、また内閣支持率も43%近くで、そのほかの調査でも軒並み、現政府に対して高支持率を与えているのに、選挙結果は逆と出ている。

投票率が低いこと(約45%)が、組織力を誇るPRIにとって有利に働いたというが、メキシコ国民の自由気ままな国民性を反映しているともいえる。まさに選挙は水ものと言われるとおりの結果であった。

選挙期間中、こんな話題もあった。地元の政治家に不満を持つグアダハララの市民らが、中間選挙の地元候補者として「犬」を選んだという。

市代表として出馬することになったのは、1歳6か月のアメリカンピットブルテリア、フィデル君で、選挙戦用ポスターには、「フィデルは人民の代表者。腐敗は断じて許さない。彼は私欲では動かないし、特に誰とも手を組んだりはしない」などと書かれている。

どうせ誰が当選しても同じなら、犬が議員になったほうが、よっぽどクリーンだと思わせるところだろうが、庶民階層が政治家に抱いているイメージを、ユーモアとはいえ、政治家諸氏はどう感じたのだろうか。その後の経緯は出ていなかった。



(見過ごした?)

メキシコの選挙運動は、選挙カーによる候補者名の連呼がなく、実に静かである。候補者のポスターの集中掲示板というのではなく、人海戦術で張ったと思われる、電柱という電柱には候補者の顔写真が貼られたり、ビルの屋上には空を圧する巨大な政党や、候補者のポスターが掲示されている。

時には白い塀の壁にも政党の名前がペンキで描かれ、その上、道路を渡して顔写真の旗がはためいて、信号も見づらいこともある。選挙の終わった現時点でも、相当のものが始末されずに残っている。

撤去作業もたいへんだらう。また、殆どのポスターが政党名の上に、大きく×が書かれていることである。投票してくれと言う意思表示なのだろうが、私の感覚では、ネガティブな方に考えてしまう。しかし、日本とメキシコ、どちらの選挙戦が、投票に行く気を起させるだろうか。回答は難しい。



日本でも、これから本格的な選挙モードに突入するだろうけれど、日本の世情はインターネットで知るのが、各社を横断的に眺めることが出来、いわば、「傍目八目」的に眺めているからなのだろうが、不思議なことに気がついた。

例えば、3月頃から始まった、ある人の献金をめぐり、マスコミや反対党による執拗な追及と、説明責任を果たせと言う言葉など、似たような形態をとっている人もいる、もう一方の側については、殆ど問われない。

どちらにもくみしていない門外漢から見れば、「どうしてなの？」という素朴な疑問が湧く。

そこで、タイトルに使ったのが、「**Dijo la sartén a la caldera : tira allá culinegra**」(ディッホ ラサルテン ア ラ カルデラ : ティラ アジヤ クリネグラ と発音し、直訳は、「フライパンがヤカンに言った : あっちへ行け尻黒女」だが、長いのでタイトルは簡略化し意識したが、日本語の諺では何に相当するのだろうか。

あえて考えると、同類の欠点を持った相手を、非難していると考え、例えば下品になるが、「目糞が鼻糞を笑う」というのに相当しそうだ。

スペイン語の類似の諺に、「ロバがラバに言った:あっちに行け耳の長い奴」というものもある。隣に座っている女性社員に、これらの諺はどういう場で使うのか、聞いたところ、分からないといわれたので、日本語の諺から推理して、説明したところ納得されたが、私にとっては実に愉快的な諺である。

高邁なる信条を持った政治家を、フライパンやヤカンにしたり、ロバやラバにするつもりは無いが、相手を貶しあうのではなく、もっと我々の生活や将来に必要なに迫られていることを、堂々と論議してもらいたいものである。その意味で、サブタイトルで補足したのである。

同様に、タレント知事を選挙に担ぎ出そうとした騒動時の、「地方分権」と言う言葉も、上記の「説明責任」という言葉とともに、言葉だけ先走って内容がさっぱり分からない。

「地方分権とかけて」、「UFO と解く」

「その心は! ?」、「いつもマスコミの話題になるが実体を見た人がいない」

これは佐高 信著、「佐高 信の新・筆刀両断」からの孫引きである。元は大分県知事だった平松守彦氏のことを書いた評論中にあるのだが、書かれたのが、2001年7月とあるから、相当昔からこの話はあるはずである。さも新しいように、マスコミがこぞって報道するものだから、時代のキーワードのように見えるだけだと思うのだが。

少ない情報と乏しいスペイン語の知識から、断定的なことは言いにくいけれど、当地の新聞を見る限り、当事者についての、連日のように、一方的な報道スタイルは見たことが無い。一方的な報道は裏に何かありそうだと、逆に疑問を持ちたくなる。

ボラッチョ・ポニート氏の、若い頃の「人に嘘を言うな」、「人は信じなさい」という親から受け継いだ、教育信条も、年をとるとともに、性格が変わり、「まず物事は疑ってかかれ」に変心しつつあるのではなかろうか。

年はとりたくは無いが、仕方がないとあきらめざるを得ない。

(2009年7月13日)

(次ページに写真あり)



停留所にはってある投票呼びかけ巨大ポスター(写真内左の人と比べてください)



様々な形態の選挙用ポスター掲示方法(掲載写真は、最寄の駅から、配属先までの20分の間に見られた風景である)